

むかしの高松

2005. 3
第18号

★ 遺 跡 紹 介 ★

高 松 城 跡 (無量壽院跡)

— 解 明 !! 高 松 城 築 城 以 前 —

① はじめに

近年、高松城跡の周辺で幾つもの発掘調査が行われ、高松城築城以前の高松の実態が次第に明らかになってきました。天正16年(1588年)の生駒親正の高松城築城によって城下町の歴史は始まりますが、発掘調査ではこれよりも古い時代の遺跡が確認されています。

② 発掘調査の概要

遺 跡 名 高松城跡(無量壽院跡)
調 査 地 高松市寿町一丁目・西の丸町
調 査 期 間 平成14年11月28日～15年3月14日
調 査 面 積 820㎡
調 査 原 因 市街地再開発関連街路事業
(高松駅南線)

③ 発掘調査の成果

確認されたものは、井戸・溝・柱穴・土坑(大形の穴)等多数の遺構であり、中世段階において集落が営まれていたことが判明しました。特に、調査区中央部で東西方向に延びる溝(SD1302)は、最も注目すべき遺構です。溝の幅は約2メートル、深さは約0.6メートルであり、16世紀のものと考えられる土器や瓦などが多量に出土しました。その中には「野原濱村无量壽院」(注:「无」は「無」の異体文字)と刻まれた瓦や梵字瓦がありました。いっしょに中国から輸入された青磁の香炉や五輪塔も出土しました。これにより、調査地が香川県屈指の古刹である「無量壽院」の跡地であることがわかりました。無量壽院の寺記によれば、天文年間(1532～1555年)に今の高松城の地に移転したと言われています。



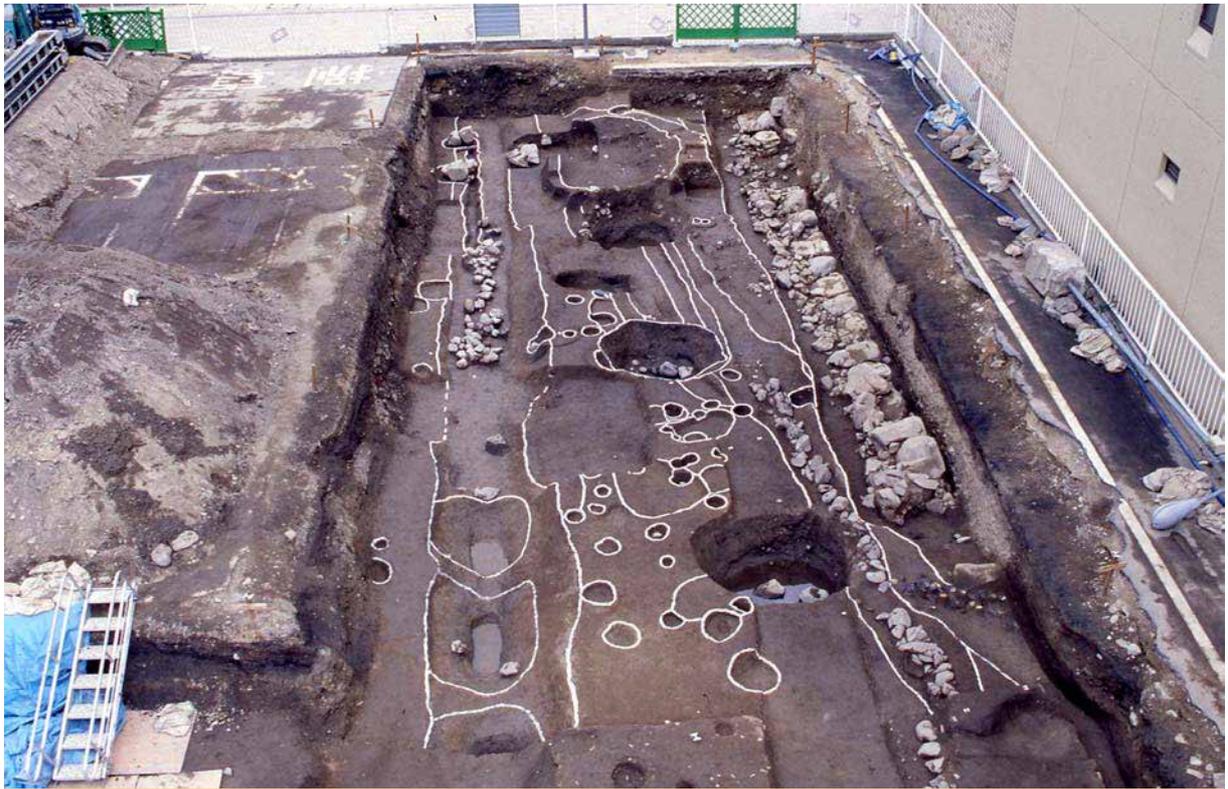
遺跡の位置

「国土地理院発行の2万5千分1地形図(高松北部)の一部を掲載」



12～16世紀の遺構

井戸・溝・柱穴・土坑等を確認しました。
中央通りの奥が高松城本丸です。



12～16 世紀の遺構の完掘状況

左側の幅広い溝がSD1302であり、「野原濱村无量壽院」の文字瓦が出土しました。中央手前より二つ目の大きな穴が井戸です。小さな穴は柱穴です。



SD1302 の完掘状況

この溝から文字瓦や梵字瓦・香炉・五輪塔などが出土しました。



柱穴の完掘状況



井戸の完掘状況



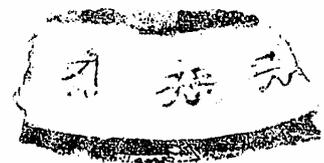
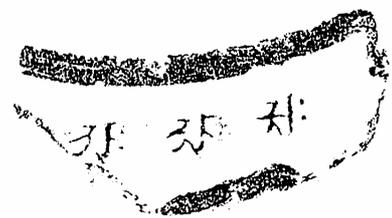
「野原濱村无量寿院」と刻まれた瓦



青磁香炉



五輪塔 (左：水輪，右：空輪・風輪)



梵字瓦

④ 無量壽院について

現在、高松市御坊町にある寺院であり、真言宗御室派に属し、紫山随願寺と号します。京都仁和寺の末寺で、付近の多門寺・西福寺など6ヶ寺を末寺としていました。

天平 11 年（739 年）に行基が坂田郷室山の麓に創建し、その後空海が修造し、七談議所の一つとしてその伽藍は荘厳であったと言われています。白川法皇・亀山天皇は厚く信仰し伽藍再興により更に興隆したと言われています。

応永 19 年（1412 年）の『北野天満宮一切経』には「讃州野原無量壽院住善海」の名がみえ、その奥書には野原無量壽院・野原西浜極楽寺・野原福成寺などの寺院名が散見できます。また、藤原親長の日記である『親長卿記』文明 5 年（1473 年）3 月 24 日条に無量壽院の記載があります。

天文年間（1532～1555 年）に戦火で伽藍が焼失し、寺は八輪島（現在の高松城付近）に移転しました。今回の調査で出土した文字瓦はこの時期のものであり、調査地が無量壽院跡であることがわかりました。

天正 16 年（1588 年）に生駒親正が高松城を築城するにあたって、寺は西の方（浜ノ町）に移転しました。

明暦 2 年（1656 年）に御船蔵を作るために中村（現在の中央公園の南側）に移転しました。寛文 7 年（1677 年）藩の長屋を作るために御坊町に移転し、現在に至っています。

主な寺暦

	西暦	主な出来事
天平 11 年	739	行基が坂田郷室山の麓に創建
弘仁年間	810～823	空海が修造
		白河法皇の特勅で興隆
大治 4 年	1129	住持覚道が白河法皇の陵を築く（中野町付近）
		亀山天皇により再興
嘉元 3 年	1305	亀山天皇の陵を築く（宮脇町石清尾神社付近）
応長元年	1311	談義所となる
応永 19 年	1412	北野天満宮の一切経に住持善海が参加
天文年間	1532～1555	戦火により焼失し、野原郷八輪島（現在の高松城付近）へ移転
天正年間	1573～1592	生駒親正の高松城築城により西の方（浜ノ町）に移転
明暦 2 年	1656	御船蔵を作るため、中村（現在の中央公園の南側）に移転
寛文 4 年	1664	藩主松平頼重から毎年米 30 俵が合力米として給される
寛文 7 年	1667	藩の長屋を作るため、御坊町（現在地）へ移転
元禄 14 年	1701	山田郡六条村青木免で 53 石 3 斗が寄進される
昭和 20 年	1945	高松空襲により堂宇・寺宝を焼失
昭和 22 年	1947	再建

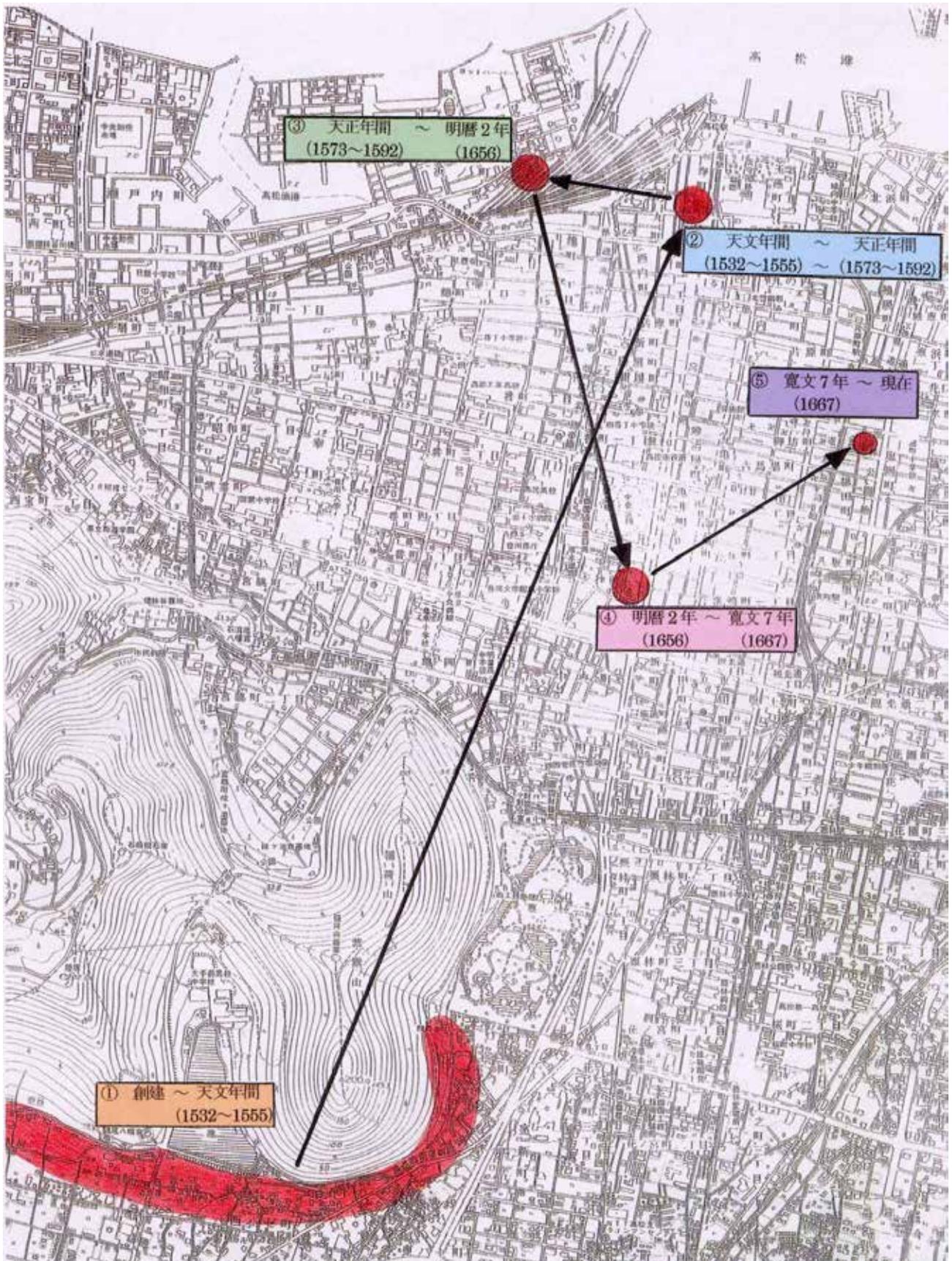
参考文献

『日本地名辞典 香川県』角川書店 1985 年

「讃岐國名勝図会」『日本名所風俗図会 14 四国の巻』角川書店 1981 年

「無量壽院随願寺記」『新編 香川叢書 第一』香川県 1939 年

『紫山随願寺 無量壽院の記』手塚靈巖編 1970 年



無量壽院の変遷図

⑤ 中世（鎌倉～室町時代）の高松城周辺

江戸時代初め頃に書かれた『南海通記』には、当時の高松について西側と東側に海が湾入しその間に砂洲が突き出す地形と西濱・東濱という小さな漁村があると書いています。しかし、近年の発掘調査の成果はそのような姿を一変しつつあります。調査では、湊・寺・墓地・集落と考えられる遺構が見つかっており、交通・流通の拠点であり大きな経済力を持った中世都市としての「高松」が見えてきます。

西の丸地区(②)の発掘調査では、軟弱な地面に石を敷いて補強したと考えられる護岸状の遺構や船着場と思われる木組や木製の碇が見つかっており、さらに各地から運ばれてきた土器が多量に出土しており、「湊」であると考えられています。

東の丸地区(③)の発掘調査では、集石による「墓」が多数見つかりました。墓には土製の鍾が副葬されていたものがあり、漁民の墓群であると推測されています。浜ノ町遺跡(①)では、中国産の白磁壺を蔵骨器として使用されていました。

浜ノ町遺跡(①)は、規模の大きな区画溝で囲まれた「集落」であり、掘立柱建物や井戸などが見つかりました。当時貴重であった陶磁器や瓦が多量に出土し、寺院跡あるいは有力者の屋敷跡と考えられています。丸の内地区(④)・松平大膳家上屋敷跡(⑤)・東町奉行所跡(⑥)の発掘調査では、井戸・溝が検出されて「集落」であったことがわかりました。

「寺」は、今回紹介した無量壽院跡において確認されました。

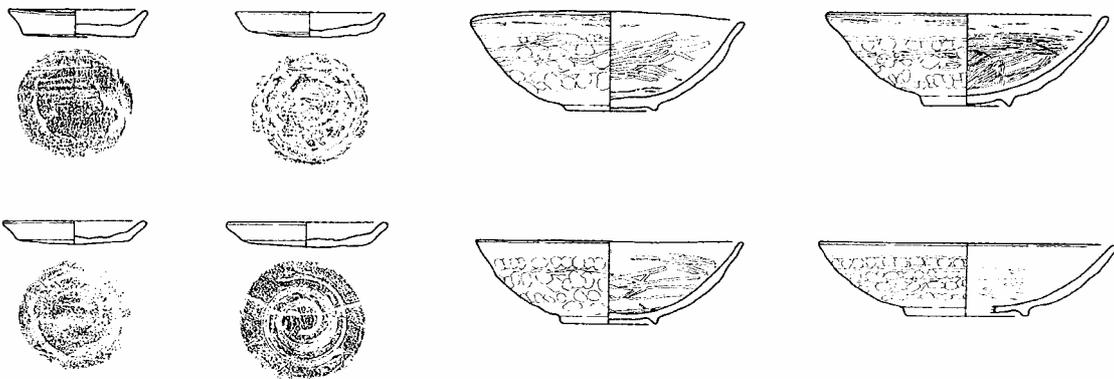
このように大きく栄えていた中世の港町を立ち退かせて、高松城は築かれたのです。



12世紀頃の溝



溝から出土した多量の土器



ほじきこざら
土師器小皿

がきわん
瓦器椀

溝から出土した土器

① 浜ノ町遺跡



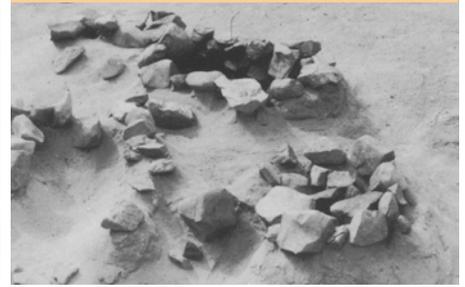
[集落・墓]

② 西の丸地区

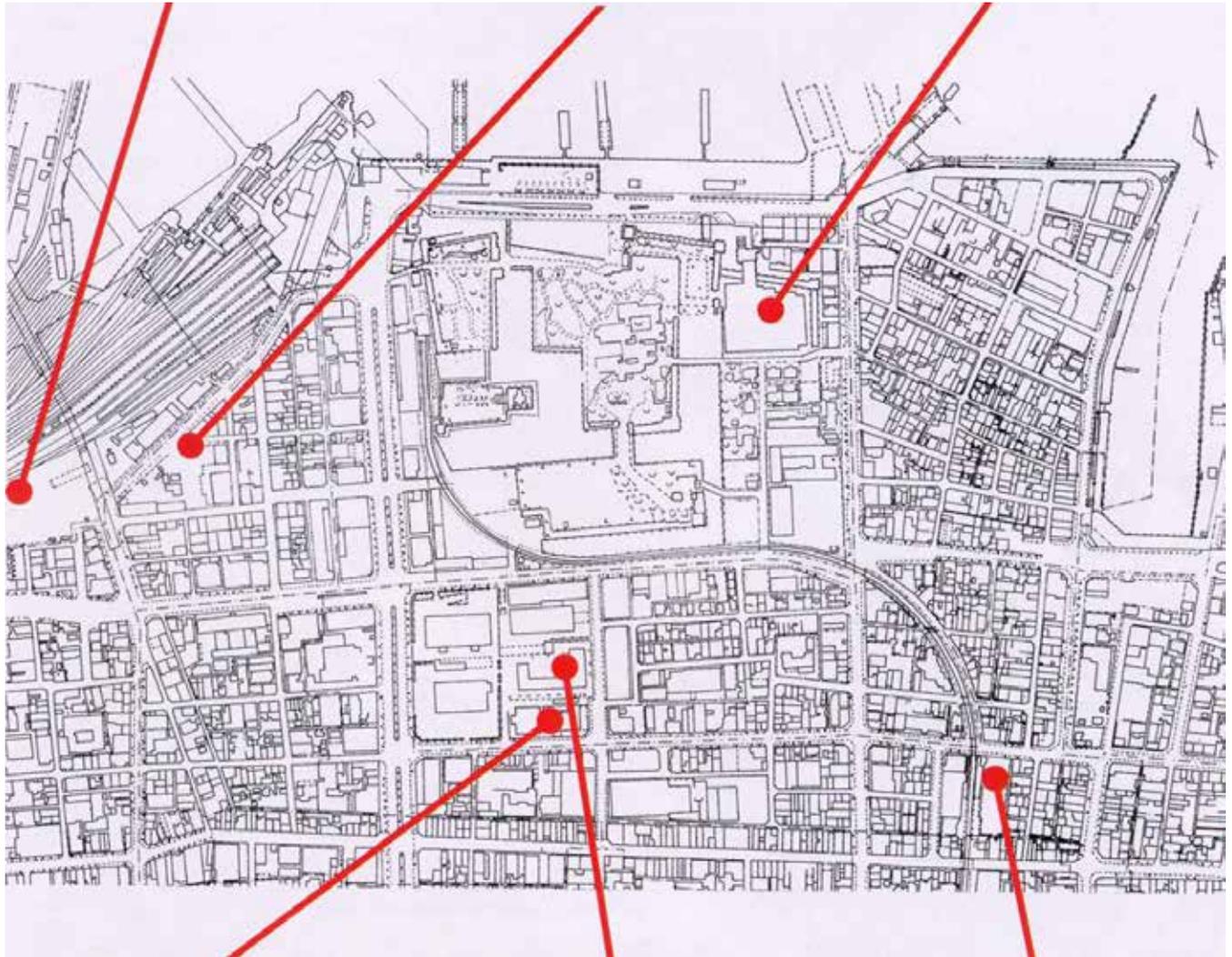


[湊]

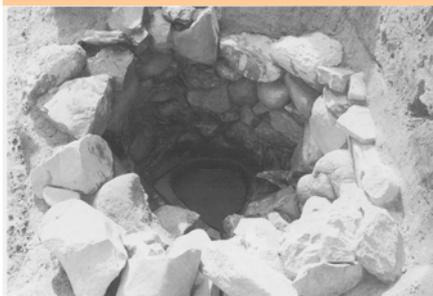
③ 東の丸地区



[墓]



④ 丸の内地区



[集落]

⑤ 松平大膳家上屋敷跡



[集落]

⑥ 東町奉行所跡



[集落]

(①～④の写真は香川県埋蔵文化財センターより提供していただきました。)

トピックス

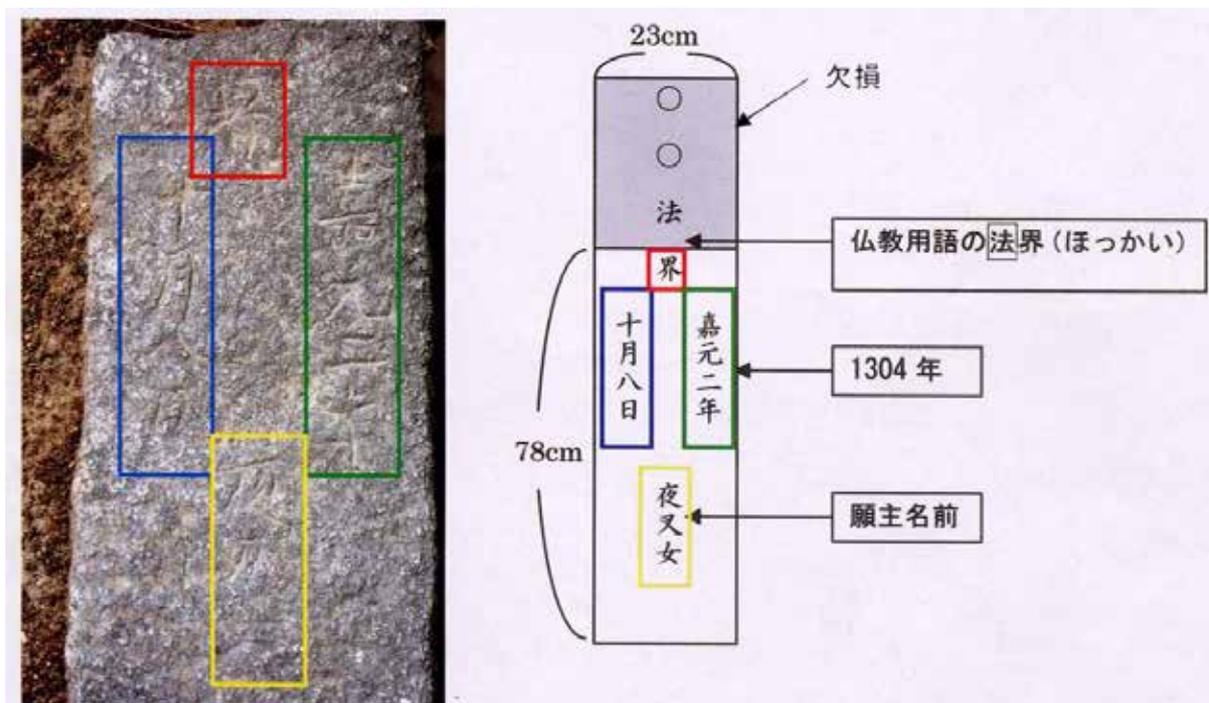
発見！ 転用された文字刻印石材

高松市教育委員会は史跡高松城跡整備事業に伴い石垣の調査を行っています。この調査中に、高松城跡本丸南東隅階段の側壁最上段に文字の刻印がある石材を発見しました。

発見した石材は23cm角、残存する長さ78センチを測る直方体の花崗岩です。上面には上端に「界」、その下部に「嘉元二年十月八日」、さらにその下部に「夜叉女」と刻印されています。上下ともに欠損しており、特に上部には文字が続いていたものと考えられます。文面や文字の配列から、嘉元2年（1304年）10月8日に夜叉女という人が建立した石塔と考えられます。

（香川大学教授田中健二氏（中世史）の御教示による）

高松城築城（改修）時には、鎌倉時代末期の石塔までも利用していたことが判明しました。周辺に中世の寺院や集落の存在を示唆するもので、数少ない中世の文字資料が得られたことも貴重な発見です。



編集後記

近年、サンポート高松の整備などに伴う高松城跡周辺の変貌は目を見張るものがあります。21世紀の新たな都市としての「高松」が築かれています。しかし、その地下には中世の高松が静かに眠っているのです。

今回紹介した無量壽院跡を含めた発掘調査速報やこれからのイベントはホームページでも掲載しています。ご意見・ご感想をお待ちしています。(K.N.)

むかしの高松

第18号 2005. 3. 31

編集発行／高松市教育委員会

高松市番町一丁目8番15号

TEL 087-839-2660

<http://www.city.takamatsu.kagawa.jp/>